

# フィンランドの作家たち（その1）

## Finnish Writers in Youkobo 2016

Finnish Writers in Tokyo in cooperation with the Union of Finnish Writers, Helsinki and Youkobo Art Space, Tokyo

### 目次

・まえがき 村田弘子

・エッセイ

「遊工房アートスペースの回想」

ハンヌ・ヴァイサネン

「偉大な仏陀の中そして他の偉大な記憶」

ティーナ・レヒコイネン

「ベストセラーの伝記「The Life of Malin」（2074年）より 第523章：日本、2016年11月」

マーリン・キヴェラ

「遊工房、貴方と私」

ハンネル・ミカエラ・タイヴァッサロ



遊工房におけるアーティストや研究者の受入は1989年より始まり、海外からの作家の創作・研究活動の場として定着、国際機関からの推薦枠の受入れもある。ここに紹介するプログラムは、フィンランドの作家活動支援機関・フィンランド作家協会（UFW, The Union of Finnish Writers, Suomen Kirjailijaliitto）との新たな取り組みである。2015年フィンランド・センター東京・文化担当・Ulla Kinnunen（ウラ・キヌネン）氏のご紹介とご尽力により実現したもので、2016年2月、協会代表のSuvi Oinonen（スビ・オイノネン）氏が遊工房を視察訪問、協会との覚書に基づき年間3人・組の作家滞在の受入が始まった。2016年秋（9月～11月）の3ヵ月間、以降は春（3月～5月）の3ヵ月間が予定される。フィンランド作家協会は、フィンランドの作家活動に対して、多角的な支援をしている団体で、作家の創作活動への海外機会創出のため、海外の幾つかのレジデンスと連携しており、アジアの拠点として遊工房が選定された。この冊子は、1年目の2016年・秋に滞在した3人・組（2名+1組、計4名）の作家が遊工房での滞在を機会に執筆した、エッセイをまとめたものである。

### 2016年・FWU招聘・滞在作家

2016年9月1日～30日 ハンヌ・ヴァイサネン

2016年10月3日～30日 ティーナ・レヒコイネン

2016年11月2日～30日 マーリン・キヴェラ&ハンネル・ミカエラ・タイヴァッサロ



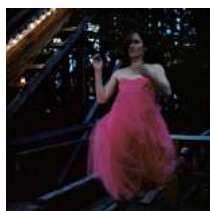
#### ハンヌ・ヴァイサネン

オウル（フィンランド）生まれ、パリ（フランス）を拠点に活動、ヴィジュアルアーティスト、ライター、舞台美術家、衣装デザイナー、ディレクター、イラストレーター、そしてキュレーターなど様々なアートの分野を往来。作品はフィンランドやヨーロッパにある多くの美術館に所蔵され、オウルやヘルシンキに、パブリックアートを制作。著書には、『Kalevala』2000年出版。2007年に『Other Shoes』でフィンランディア文学賞受賞。2008年The State Prizeビジュアルアート部門、2015年は同文学部門を受賞。Galerie Forsblom所属。



#### ティーナ・レヒコイネン

タンペレ（フィンランド）を拠点に活動する詩人。詩や現代の格言に関する5つのコレクションを出版。作品では、言語の断片化がインターネット時代の溢れ出る情報が起こす弊害を反映している。自由に体感出来ないこの時代において想像力と感性が再び解放されることの重要性を言及、詩に政治的なことと個を織り交ぜている。さらに、ヴィジュアルアーティストとしても、動画やインスタレーション、ドローイング、コラージュなど様々なメディアを扱う。2005年からは文芸指導もし、The Union of Finnish Writersのメンバー。フィンランドの取集誌「Tuli & Savu」(Fire&Smoke; 2013-2015)の元編集者。



#### マーリン・キヴェラ

フィンランド、ヘルシンキ出身の作家。これまで三点の小説のほか、演劇や子供向けの本を出版。また、パフォーマンスの分野でも活動。新しい形を模索し具体的な文書を作り出そうと試み、日常の中で脇に追いやられ隠されている物事に興味を持ち焦点をあてる。



#### ハンネル・ミカエラ・タイヴァッサロ

フィンランド生まれ同国在住。作品は母国語のスウェーデン語で執筆。散文、児童文学、ドラマを書き、舞台演劇のみならず、ラジオドラマの脚本も担当。また、詩集、雑誌や新聞などに、エッセイや短編小説も発表。小説「In transit」を、2016年今秋に出版。小説「Fem knivar hade Andrej Krapl」で、フィンランド国立図書館賞「Runeberg Prize」を受賞。フィンランドのスウェーデン作家連合で活動し、フィンランドの文学祭Vasa LittFestの芸術監督。また、文学雑誌「plump」の主任編集者の一人で、オーボ・アカデミー大学で教鞭をとる。最新のパフォーマンス「Imperfekt」は、マーリン・キヴェラとの協働により、2014年ドイツ・ベルリンのフィンランドセンターで公演された。

## 遊工房アートスペースの回想

ハンヌ・ヴァイサネン

私は昨年9月、東京の遊工房アートスペースで「滞在アーティスト」として招聘の機会を得た。フィンランドの作家協会が、今年、早い時期に、この「マイクロ・レジデンス」と協力の合意を締結した。私は遊工房アートスペースの初めてのフィンランド作家だった。もちろん、これは大きな特権である。

いわゆる「マイクロレジデンス」は、世界中の大規模なレジデンスよりも、通常、小さくて、より家庭的なレジデンスを意味する。私は個人的にパリのCités des Arts、ニューヨークのスカンジナビアセンター、アテネ、ローマなどを知っている。マイクロレジデンスの特徴は、レジデント同士が、すぐに知り合いになれ、小さな建物は、しばしば個人住宅を思い起こす。大きな施設にくらべ滞在者数も少ない。遊工房の場合もこの様な状況で、ほとんどがポジティブであった。敷居は低いように見えた。

私の最初のフィンランド作家としての役柄は、もちろん、遊工房滞在中の他のビジュアルアーティストとはかなり異なっていた。生活空間は伝統的なアーティストのスタジオではなく、西洋風のモダンで広々とした2部屋のフラットだった。フラットは多くの感覚で非常に実用的であり、とりわけ非常に静かだった。特にライターの場合、集中するために、これは基本条件の1つである。ソーシャル・イブニングや興味深いアーティスト・ミーティングは、私の東京の忙しい時期でさえ必要なものであった。

私は仕事が非常に迫っている瞬間に日本・東京に居た。今年3月、主に東京での滞在中に書きあげる本「The Ancestors」の新刊を準備中だった。同時に私は日本のフィンランド文化センターが主催する多数のイベントにも参加した。このような状況で、東京の観光は非常に控えめになった。東京の大勢の人々は本当に急いでいるように思えた。その絶え間ない喧騒の気持ちが私を捕らえ、自分自身は、かなり勤勉だと思っていたが、本質的に時間がないと思った。

悲しいことに、全ての必須だと思っていた計画を充分に見ることはしなかった。私は様々な観光スポット、博物館、建築物、庭園などの長いリストを持ち、東京の各地区を比較するつもりだったが、すぐに、この課題は延期されなければならないと理解した。

遊工房アートスペースの本当の問題点の1つは、もちろん個人的な意見だが、他のレジデントが間違っていると思うかもしれないが、市の中心部から距離がある。（ある場合、またはいくつかがある場合）私が中心部に行きたいときはいつも、非常に限られた時間内にできるだけ多くを見て、真夜中までに私のところに戻ってくるために、非常に慎重に特別な計画を立てなければならなかった。1つか2つの博物館を見るために一日中を費やした。東京は大都市なので、距離は相対的だ。1ヶ月はすぐに非常に短くなる。

自転車はすぐに私の親友になった。（自転車の品名「LOPETA」は、フィンランド語では「生まれ！」という意味だったにも関わらず…）。自転車がなければ、私の滞在はずっと貧しいものになっていただろう。また、コンピュータの前で数時間静かに座っている傾向のある作家にも役立つ。自転車は、東京の中心に向かう最も大きな選択肢の最も近い大きな駅（荻窪）に私を連れて行った。



私は数回来日しており、日本は大変なじみ深くなっている。以前の滞在では主に関西に居た。以前の来日時にも東京を急ぎ足で訪れていたが、にもかかわらず東京とその周辺はまだ余り知らなかった。私は少し日本語を学んでいたが、うまくない日本語だが、それは決して本当の障壁ではない。正しい表情が見つからないときに、地元の人たちと絵でやり取りする事ほど楽しいものはない。だから私はいつもポケットに小さなメモ帳を持っていた。

遊工房の滞在中の生活と滞在に関するすべては、スタッフの皆さんのおかげで何の問題もなくなった。私は近所への移動の方法を大変素早く学び、スーパーマーケット、ハードウェア店、ソフトウェアの店やレストラン、「寿司列車」を見つけた。日本人は非常に親切であることで知られているが、再認識した。私の日本語は下手だが、基本的な問題はすべて解決した。地元の人々との長い話しをしたいがために、わざと道を迷うことが好きになるという特別なこじつけを持った。

私は日本郵便と恋に落ちた！次の本のイラストレーションを準備していたので、何度か特急小包をフィンランドに送り返ししなければならなかった。日本郵政公社のスタッフは、パニックに陥ることなく、すべてのこれらのフォームを満たし最高の優しさで私を助けた。そして、いつも小包は安全かつ時間通りに到着した。

私は9月に東京に滞在し、10月には大阪で仕事を続けた。日本・大阪を拠点とする文楽隊との長期のプロジェクトを持っており、東京を離れることでステージングを完全に変えた。全く異なる2つのアーティスト・イン・レジデンスを比較する素晴らしい機会を得た。友人の建築家と彼のオフィスは、古い大阪のタウンハウスを外国の作家、写真家、アーティスト向けの滞在スペースに改装する予定があった。私の滞在中は、改装工事はまだ始まっておらず、ただ一人で、東京の時のような快適とはいかない状況で暮らしていた。しかし、古い伝統的な日本の家屋の素晴らしさは、空調設備の欠如やその他の欠点を大きく補うものだった。10月の夕暮れに、庭園のドア・ストーンに座ってお茶やワインを飲むのは優雅だった。東京でも大阪でも、私はモルモットとしてアーティスト/作家として滞在条件をテストしていた。どちらにも利点と不都合があった。東京で素敵で快適なフラット。しかし、私がよりよく知りたいと思っていた中心部から遠かった。一方、必要な改装を待っている悪い状態の古い家屋。しかし、市内中心部からわずか15分。

遊工房のために何かを提案するとすれば、次のようなものだろう：新しい滞在者が到着時のシティツアー。観光ツアーや博物館訪問のことではない。私は、東京という大都市の構造を理解するためにツアーについて話している。距離や、ある場所から別の場所への移動の難しさ、異なる地区の生理学を理解すること。もちろん、これらのツアーは公共サービスで行われるべきもの。このような街ツアーは、私たちの多く、特に初めて日本に来る人たちに役立つだろうと確信する。私たちのほとんどは、日本の文化や日常生活、神話やマンガ、現代美術に欠かせないものに深く関わるために日本に来ている。これは私が日本と東京を滞在地として選んだ主な理由だ。将来の仕事に影響を与えるはず。おそらく私たちに新しいものを作り出させることさえ可能。その新しいインスピレーションの源にアプローチするには、クリエイターの光栄の椅子がどこにでも運ばれるべきということではない。時には少しの抵抗もエネルギーを作る。



# 偉大な仏陀の中そして他の偉大な記憶

ティーナ・レヒコイネン

1. 歩く
2. 話す
3. 写真を撮る
4. 呼吸する

10月上旬に東京に到着した。私はフィンランドのトゥルクのブックフェアで週末を過ごし、飛行機で寝ることができずに疲れた。夜通し麻雀をして過ごし、新作の日本映画を観ていたの、レジデンス滞在当初は、ひどい時差ボケがあった。私の最初の明確な思い出の1つは、横浜への訪問。それは晴れた金曜日だった。村田夫妻と滞在作家のラデックさんと私は朝早く東京の外に向かった。横浜では、さまざまな博物館を訪れた。アートワークは巨大で、名刺を印刷するのを忘れていたので、私は小さくて恥ずかしく感じた。

チャイナタウンでは、校庭でドラゴンの舞を観た。タクシーの窓には素敵なレースカーテンがあった。午後には、KAAT（神奈川芸術劇場）に行き、塩田千春展「ロククルーム」を観る。私は展示を熱心に観て、廊下の巨大でカラフルなビデオスクリーンも芸術作品だと思ったが、そうではなかった。それは、体操エクササイズのテレビ番組だった。

次の夜は風が強く、地震がやって来るのではないかと恐れた。しかし決して来なかった。私の頭の中だけで何かか震えた。翌日、私は次の本のタイトルを変更することに決めた。

私は日本ではどこにでも崇高なものがあると期待していた。それは間違えただけで、未だに私は現代日本の文化が、なんて相反していて矛盾しているのだらうと驚いていた。

私は多くの神社、博物館、そして古本屋を訪れたが、原宿と秋葉原の漫画通りでも過ごした。東京では、神聖なものや軽いものが並んで存在し、しかも調和のとれた特別なアンサンブルを構成している。

2週間目には六本木エリアの森美術館へ行く途中で迷子になった。私はいつもオリエンテーリングの才があるようだが、今回は何かうまいかず、修道院に入って終わった。3人の尼僧が日本語で私に話かけた。そして、私は「すみません、分かりません。」という言葉だけを繰り返した。ついに彼らの一人が私に地図を描き、お礼を言って立ち去ろうとしていた時に、そのうちの1人が「神はあなたを祝福します」と言った。一瞬、私は彼女が、なんの神を意味したのか疑問に思った。



滞在中の最高の思い出は、鎌倉への旅をしたこと。朝の電車を新宿から江の島行きに乗り換え、地元の路面電車に乗り換えた。鶴岡八幡宮では伝統的な結婚式を見て、長谷観音では花が美しく咲いていた。建長寺ではすばらしい半僧坊に、高德院神社では、ついに鎌倉の大仏に会えた。そのうえ実際に私は仏像の中に入った。お金を払うと聖なる像に足を踏み入れることができる。そのアイデアは、実は「大仏の中にいる」という全くばかげたことだった。「こんにちはワールド!」、私はその女の子。仏の中には心がありませんよ。ただ凸の胸。

私と日本との関係は文学的なもの。新宿の夜のネオンライトの中をさまよった時には、Endon Shusakuの小説「Scandal」とその反抗的な男性の主人公を思った。アパートで色々な日本食を調理した夕方には、吉本バナナの斬新な小説「キッチン」での中ので恥づかしがり屋に夢中だった。日本の風呂屋は、谷崎潤一郎の物語などから、私には親しみやすい雰囲気をつ捉えた。

しかし私はまたいくつかの新しい物語やアイデアを考え出した。

遊工房アートスペースの近くの神社で流鏝馬を見て、私に一話が現れた。この伝統的な競技では、走っている馬の上の射手は、木製の標的に3つの特別な矢を撃つ。力のある動物を信じては、いないが、馬は未だに私の想像力と私を常に目覚めさせる。

私の原稿は、滞在期間中に準備ができたので、自分の目標を達成した。

昨夜遊工房で、妹からのテキストメッセージを受け取った。私たちの古参の猫ナラが死んでしまった。飛行機の中で私は、毛皮が炎や太陽のような赤いメス猫の詩を書いた。私の「ライジングサンの国」での時間は終わった。

クリスマス休暇の間、私はついに、この旅について考える時間ができた。帰国してから約2ヶ月たった。日本で多くの重要な経験をしたが、一言で言うなら、ひと月の間、歩くこと、話をする事、写真を撮ることをしていたのだ。

その3つの習慣は私に日本文化の一寸した味を得る方法を提供した。しかし、最も重要なことは呼吸。私は毎晩ヨガをして落ち着き。前の本を書いている間に私の中に巣くっていた不幸を悲しんでいたが、少しずつ、明るく感じられて、自分で、ふざけ始めた。招き猫（お守り）が今戸神社で私を迎えたとき、私は手を上げて手を振った。

しかし、私は今、幸せな猫の話を書いていない。または修道女または大仏。

しかし、わからない。ある日、私の短編小説にそのような思い出の一部が浮かんでくるかもしれない。「本当に幸せな記憶がいつも輝いている。時間が経つと、ひとつひとつ、彼らは生き返る。」と、吉本バナナ氏は言っている。



# ベストセラーの伝記「The Life of Malin」 (2074年) より

## 第523章：日本、2016年11月

マーリン・キヴェラ

私が覚えていること：

病気解消。ヘルシンキで飛行機に乗るやいなやインフルエンザが消える。何か、あつという間に溶け終えた。家から逃げる。それは私とその時にしたこと。

駅で私の目を開く：柔らかい色。平和なペース。まるで雲の中に埋め込まれているかのようなステーション。私はそれに足を踏み入れた。湿気は秋から乾燥していた私の体を抱きしめた。

最初の一杯のお茶：炒ってある茶色の。遊工房アートスペースの素晴らしいスタッフの歓迎。このスペースは因に、まだ継続し続けて、いつまでも咲き誇る。 私たちが計画しているパフォーマンスについて何かをつぶやき、すぐに正しい質問が聞かれ、私の感謝、救済に。

私は漂うことを思い出す。列車、バス、地下鉄、自転車、徒歩で行く。奇妙な鳥の中、公園で走っている。すべての方向感覚を失う。この国では、私にとって、すべてが楽しく興味にあふれている、完全に迷っているが試してみている。2つの日本語の単語だけ知っている。

食べ物、スタイル、コントロールを愛する。誰もがフレンドリー。地面に1つ、ゴミが见かける。2週間で1つ - 通りに公のごみ缶がほとんどなくても。

私のゴミを並べると、最初は混乱していたが、その後は益々強迫観念になった。

私は京都を思い出す。夢のように緑の山々を見るが、その代わりに観光客の洪水で迷子になった。お金はすべて煙たいカフェで費やした。芸者の後を追って、車のライトの中で秘密で撮影した。

墓地を見つけた。

唯一の平和な場所

石の街

丘の上

墓の死者のための水ボトル。

私のお金を迷惑なバス運転手に投げつける

私は行動できなかった

日本人のように。

遅くまで起きている

毎晩

感心が高まっている私は、この週の間、眠っている時間を無駄にすることはできなかった日本と恋をしているフィンランドの女性についての本を読む。

伝説の舞踏家と踊る

若しくは伝説の息子も

そして違う舞踏家の別の友人も

79歳の、彼は身体について稀有な清廉さを持っていた。彼の周りのあるスペースは、経験によって勝った？

彼はAmazing Graceの安っぽいバージョンを何度も繰り返しプレイし、その動きや方向、彼の興味、また自分自身によって何か理解した。そして、彼は私と同じく、人間であるという事実を理解した。



At the embassy, photo by Roleff Kråkström



In Kyoto, photo by an employee at Yoshimizu Inn



Geisha



My new lifestyle

私は、ほぼ本物の忍者の衣装を買って、スパイし、隠れて、お菓子を食べて、携帯電話をチェックして、自動販売機からソーダを購入して、池の上でボートのペダルを踏んで、暑い日曜日の一日にフェスティバルに参加して、じろじろ見られながら忍者として撮影されたことを覚えている。木陰で真剣な質問に答える。夜にゲリラセッションを行うと、観衆は何を見たのか分からない。いるはずのない黒い影。子供が母親にトレーニングを受けている様子。彼が走る、母親は自転車に乗る、子供が泣く、母親が叫び、彼が吐きそうに見える、母親が毅然とする。

子供時代の疑問、子供であること、競争すること、何が重要であることの問いは、暗闇の中の私たちの顔に聞かれる。忍者が手を振る、少年は黙って見つめた。



Ninjas in the park

寿司

麺類

餅

いろんな魚

米、米、米を

食べた覚えがある

健康的で強く感じる

ああ、その日々

私は老とっていると思っていたが、全くそうではなかった

飲酒

そしてお茶のお変わりを

夜遅く子供たちと一緒にスカイプする

彼らはいつも画面上で動いていた

彼らの丸い頭を画面のすぐ近くにつけて

画像が詰まった

列車、バス、地下鉄に乗る

いつも

いつも

そして歩く

太平洋でのサーフィン

11月22°C

サーフのためだけにそこにいた佐川と

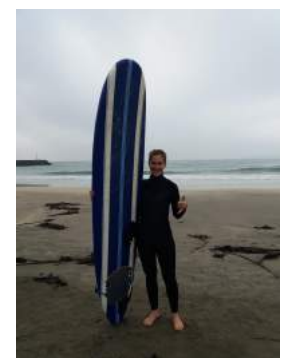
彼はサーファーとしてのライフスタイルを保つために、夜、近くのホテルで働いていた。

東京駅ではほとんど気絶状態だった。冷たい汗もかき始め、元気付けるために、プラスチックの様な、噛めるカラフルな弾の入った超甘い飲み物を買わなければならなかった。

(それ以来、私の好きな飲み物、シャンパンの毎日の服用 - もちろん、私の老後の秘密。)



Champagne in Shibuya, photo by Hannele Mikaela Taivassalo



Wannabe surfer, photo by Yukio Sagawa



その航海には何かがあった。

私はほとんど何も書いていない。しかし、私の頭の中で何かが始まる。私はそれを信じていた。私はそれが好きだった。何でも可能である、文学に関しても。特に文学に関して。アート。私の脳には新しい経路がいくつか作られていた。私は家から十分遠く、十分に長く離れていた。突然、私が何年も計画していた小説は、可能であるように、望ましくさえ思えた。難しくない。私は書くことができる。私の方法は私のものだ。私が年を取っていても、私はまだ踊ることができる。私は絶え間ない驚きの状態にすることが大好き。そして、われわれが知っているように、この小説は「ハート」と呼ばれ、わずか2年後に出版され、これまでの最も重要なものとなった（530章参照）。それは日本の影響だった。私はそれを私の中に残し、それを育てなければならぬのが分かっている。私の日本。やわらかく。友好的なやり方で。リラックスした状態。信頼する。睡眠。主に寿司、良い食べ物を食べる。これは私が学んだこと。これは私が浮動する方法。

かつて私は東京で自転車に乗った。風は湿っていて、マイルドだった。太陽は暑く、私は髪を洗ったばかりだった。誰も私を見ない。私は右側を走り、私は左側を走った。誰も気にしなかった。私は見えなかったの？ 色、熱および運動エネルギーの成分。風景の単なる一部。突然私は私だった。



Malin in 2074

## 遊工房、貴方と私

ハンネル・ミカエラ・タイヴァッサロ

私は3つのことを心に抱えて、日本の東京にある遊工房に行った。それは、休息すること、知られていることから逃げて未知なことに触れる、そして私の3つのプロジェクトに取り組むこと。そう、良いことは3度来る。

私は、懂れていたものすべてを手に入れることを期待はしてなかったが、それ以上手に入れた。1つ目は、複数の言語の間に入ることが出来た。それは、毎日自身の言語の中に深く入り込んでいる私の様な人にとって、いつもスリリングである。2つ目は、インスパイアするものを見て、異なる視点を持つ人々に会うことが出来た。そして、影響を与えた新しい環境と文化に接することが出来た。それゆえに、私の芸術も間違えなく影響を受けている。私にとって、どれくらいの利益を得たのかまだ分からない。

### 1.公園の中にいる忍者

遊工房アートスペースでの一ヶ月間の一部は、Malin Kiveläも滞在した。今まで一緒に、特に演劇やパフォーマンスのプロジェクトを沢山やった。

私たちは、「I AM NINJA」と呼ばれる今後予定されているパフォーマンスに取り組んで、日本で一週間一緒に過ごした。伊賀忍者博物館への訪問等、多くのリサーチや企画を行った。

今後発表される予定のプロジェクトの一環として、私たちはまた、滞在中に「国際野外アート展・トロールの森2016」の中で1日のパフォーマンスを行った。このアイデアは、神話の忍者達と神秘的な忍術、そしてそれに関連する全てを、コーヒーを飲む、電話でインスタグラムをスクロールする、ソーダを買う、公園を散歩するなどの日常生活の行為と組み合わせることだった。また、インターネットの信頼できるソースを使って忍者の理想に関する情報を使いながら、2時間の忍者局の人生相談を行った。

私たちは物事にどのように反応し、予期せぬことを見てどのように知覚するのだろうか？ 40歳代の女性と、忍者との間の違いは何？ または類似点は何？ 忍者の理想は、私たち自身が持っている理想とほぼ同じと思う。

「Ninjas in the Park」は、「I AM NINJA」にとって非常に有用な研究デモであるだけでなく、動物の仮装を着て公園で同じ様な行為をする「ANIMALS」という一連のパフォーマンスの活動の続きでもある。例：公園のリス。私たちは公園にピクニックをしている人に邪魔くさいことをしたり、食物を乞うたり盗んだり、そこらを飛び跳ねてかわいらしくしたりする。他の動物にも同じようにする。動物たちが実際に行うことと動物がやらないこと一例えばリスやキツネが、木の下に立ってタバコを吸ったり、電話からのメッセージの送信、セルフを撮ったりなどを組み合わせてやるのだが、ここでは動物の服を着た大人たちによって非常に真剣に行われる。私たちが探検し表現したいことは、「Ninjas in the Park」のパフォーマンスと同じ。動物の人生相談口も開く。例えば、キツネがキツネの観点から生き方のアドバイスを。目指すことは、予期せぬことを通して、自分自身と世界を見続けること。



## 2 .SCANDORAMA

「SCANDORAMA」は私が滞在中の計画で『秘密のプロジェクト』として言及しているプロジェクト。主に私が滞在中の段階で正式な情報として発信したくなかったからだが、当時はあまりにも新しく、実現するかどうか分らなかったことも一つの理由。

「SCANDORAMA」はグラフィック小説のストーリーラインだ。嬉しいことに、遊工房での滞在中にそれを終わることが出来、出版される予定になっている。このプロセスは本当に速くなった。8月には私の小説「In Transit」（今秋公開）を終えて最初の休みを過ごした。しかし、リラックスし始めると、「SCANDORAMA」のストーリーが頭に浮かび、すぐにベッドから起きて、簡単なストーリーラインを書き始めた。10月に、ドイツのベルリンの2週間の滞在中より真剣に書き始め、東京で終えた。マンガの土地は非常に適していた。それは実際には私の小説「In Transit」と多くの点で正反対の、非常にきついプロジェクトだった。

「SCANDORAMA」は、数年または数十年先に設定されたディストピアである。

## 3 . BORDERPROSE

「Borderprose」は境界、境界、境界線に関する断片的な小説。私はこれがどんなものになるのか分からない。それは詩に近く、非常にミニマルな散文だが、それでも何かの話をする衝動に満ちている。まだどんな話をしているのか分からないし、登場人物もはっきり分からない。私が遊工房に着いた時には、この小説のほんの数ページしか残っていなかったし、「SCANDORAMA」を終えたから数日東京に残っていたので、滞在中は積極的に書き込むのではなく、書き終えたものを読んで念頭に置ける余裕が出来て嬉しかった。それにもかかわらず、何か新しいことを始められるような気がした。筆記プロジェクトがなければ、私は戸惑う。しかしながら、この滞在中に私にとって最も重要なことは本当に迷い込んで予期しないものを見つけることだと感じた。東京の中でも、そして自身の中でも。遊工房の皆さん、私の心を盗んでしまった。幸福。感謝！

